

病を癒すゴーヴァンの血

(『ランスロ本伝』「ガリア辺境」687～697 節)

渡 邊 浩 司

1. はじめに

クレティアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の遺作『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(*Perceval ou le Conte du Graal*)¹⁾ (以下『聖杯の物語』と略記) (1182 年頃) は未完の韻文作品であり、フランス国立図書館 12576 番写本 (筆写は 13 世紀後半) によれば 9234 行を数える。現存の状態によると物語は二部構成を取っており、物語前半と後半の主人公はそれぞれペルスヴァル (Perceval) とアーサー王の甥ゴーヴァン (Gauvain) (英語名ガウェイン Gawain) である。これまで評者の関心は、物語前半に集中し、ペルスヴァルが漁夫王の館で目撃した「聖杯」行列には様々な解釈が出されてきた²⁾。これに対し物語構造上、前半部分にとって「副旋律」の機能を果たしている後半部分には、正当な評価がなされて

1) 『聖杯の物語』のテキストは、プレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』所収、ダニエル・ボワリヨンの校訂本による (*Perceval ou Le Conte du Graal*, Texte établi, traduit, présenté et annoté par D. Poirion, dans : Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, D. Poirion (dir.), Paris : Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1994)。

2) 拙稿「ペルスヴァルに授けられた剣と刀鍛冶トレビュシェットの謎」(中央大学人文科学研究部編『続 剣と愛と—中世ロマニアの文学』中央大学出版部、2006 年、169-217 頁) を参照。

こなかった。物語を字義通りに読む限り、「森の野生児」から出発して騎士としての成長を見せるベルスヴァルが真の主人公に映るのに対し、「騎士の鑑」ゴーヴァンはベルスヴァルにとって動かぬ「試金石」であるだけでなく「引き立て役」に映るためである³⁾。

それでも、物語後半でゴーヴァンが首尾よく切り抜けていく一連の冒険を虚心坦懐に見てみれば、それがどんな騎士にも成しえない偉業であることが分かる。最大の見せ場は、「ガルヴォワの境」(‘la bone de Galvoie’) (v. 6602) を越えて「異界」へ入り込んだゴーヴァンが目にする「不可思議の城」での冒険である。彼岸的な性格が濃厚なこの城は、亡くなって60年になるはずのアーサー王の母イジェルヌ (Ygerne) が建設した城であり、同じく亡くなって20年になるはずのゴーヴァンの母も住んでいた。城には500人以上の小姓たち、夫に先立たれ領地を不当に奪われた老齢の貴婦人たち、身寄りのない乙女たちもいた。ゴーヴァンは城に掛けられた魔法を見事に解除して新たな城主となり、小姓たちを騎士に叙任し、貴婦人たちの名誉を回復し、乙女たちに良人を授けることになる。

こうした救世主的な活躍を見せるゴーヴァンが、「不可思議の城」へ赴く前に、「ガルヴォワの境」近くを通りかかり、負傷した騎士とその恋人に出会う場面がある。その騎士は、かつてある乙女を拉致して意のままにしたため、ゴーヴァンから裁きを下され、1ヶ月にわたって両手を後ろに縛られたまま、犬たちと一緒に食事をさせられたことのあるグレオレアス (Gréoreas) (異本ではグレゴリアス Grégorias) であることが後に判明する。しかしゴーヴァンと出会ったときには病状がひどく、瀕死の状態にあった。ゴーヴァンは相手がグレオレアスだとは知らぬまま、傷の痛みを軽減する薬草を生垣で見つけると、これを傷全体にあてて包帯をする。この

3) 拙著『クレチアン・ド・トロワ研究序説』(中央大学出版部、2002年)第II部第1章「『聖杯の物語』における《対位法》の問題」を参照。

場面で語り手は、「そして我がゴーヴァン卿はだれよりも傷を治す術を心得ていた」⁴⁾と述べている。薬草はすぐさま効果を発揮し、命の恩人がゴーヴァンだと知ったグレオレアスは、かつて受けた屈辱的な裁きへの報復として、ゴーヴァンの愛馬グランガレ号を奪って立ち去ってしまう。

この一節はともすると、クレティアンが皮肉をこめてゴーヴァンの偉業を語るエピソードの1つとして片づけられてしまうかもしれないが、薬草に通じた治療師としての一面をゴーヴァンが備えていることを明らかにしてくれる点で重要である。しかしながら、『聖杯の物語』のこのエピソードは、ゴーヴァンが治療行為を見せる唯一のケースではない。13世紀半ばまでに成立した古フランス語散文「聖杯物語群」⁵⁾の中核を占める『ランスロ本伝』(*Lancelot propre*) (1215~25年頃成立)の中にも、ゴーヴァンが別の方法を使って、病床に就いていた騎士に治療行為を施す場面が見つかる。それはゴーヴァンが自らの血を用いて、弟アグラヴァン(Agravain)の右脚を治すエピソードである。本稿では、このエピソードを詳しく検討した後、中世フランス文学の他の作品に認められる、血を用いた治療の類例との比較を行う。

2. ゴーヴァンの血に備わる治癒力 (『ランスロ本伝』)

(1) アグラヴァンの右脚を治すゴーヴァン

古フランス語散文「聖杯物語群」の中で最も早く成立した『ランスロ本伝』は、のちに円卓騎士団で最大の活躍をすることになるランスロ(Lancelot)の誕生から、ランスロが騎士団に迎え入れられ、活躍を始め

4) 'Et mes sire Gauvains savoit / Plus que nus hom de garir plaie.', *Perceval ou Le Conte du Graal*, *op. cit.*, vv. 6909-10.

5) 拙稿「13世紀における古フランス語散文《聖杯物語群》の成立」(中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第73号、2012年、35-57頁)を参照。

る時期を扱った長編物語である。本稿で「聖杯物語群」のテキストとして用いるプレイヤッド版『聖杯の書』⁶⁾は、ボン大学図書館 526 番写本⁷⁾（筆写は 1286 年）を底本としているが、この写本によると『ランスロ本伝』は 4 分割されている。ゴーヴァンが特異な医療行為を見せるエピソードは、『ランスロ本伝』第 1 部「ガリア辺境」(*La Marche de Gaule*)⁸⁾で、姿を消したランスロを探す旅に出たゴーヴァンが、久しぶりに弟の 1 人アグラヴァンと再会する場面（687～697 節）に認められる。まずは当該場面の検討から始めよう。

旅の途上にあったゴーヴァンは広野を進むうちに、立派な鞆を備えた剣を首に掛けた美しい乙女に出会い、森の中にあった高い塔を備えた大きな館まで案内される。この乙女は、この世で最良の騎士と 2 番目に立派な騎士を探していた。ゴーヴァンは、この 2 人の騎士の名を教えてもらうため、乙女の後について塔の中に入る。その後、塔内で 4 人の騎士との戦いを制したゴーヴァンは、剣を首に掛けた乙女に、塔で最も立派な部屋へ連れていかれる（688 節）。部屋の中央には豪華なベッドが置かれ、その周りには 10 人の武装騎士が控えていた。ゴーヴァンが臨戦態勢に入ると、最も大柄な騎士から、対戦を望むのならベッドに掛けられた布の中を見るよう言われる。そこでゴーヴァンはベッドまで進み出て布をのけると、そこにはこの世で最も美しい騎士の 1 人が横になっていた。物語の語り手は、この騎士の病状をこう伝えている。

6) P. Walter, (éd.), *Le Livre du Graal*, 3 tomes, Paris : Gallimard, 2001-2009.

7) フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司訳）「『聖杯の書』または 13 世紀散文「聖杯物語群」の誕生—ボン大学図書館 526 番写本をめぐって」（中央大学『仏語仏文学研究』第 44 号、2012 年、211-234 頁）を参照。

8) 「ガリア辺境」のテキストは、『聖杯の書』第 2 巻 (P. Walter, (éd) , *Le Livre du Graal*, t. II, Paris : Gallimard, 2003) 所収、*La Marche de Gaule*, Texte établi par E. Hicks, traduit, présenté et annoté par A. Berthelot による。

しかし彼はあまりにも苦しんでいたのもはや話をすることもできず、仰向けの状態でしかいられなかった。左腕は腫れ上がりひびだらけで、右脚も同じ状態だったので、まったく動くことができなかった。また彼はあまりにひどい匂いを放っていたので、掛け布がのけられたとき、部屋の中に留まるのは大変なことだった⁹⁾。

10人の騎士がゴーヴァンと戦う構えを見せると、剣を首に掛けた乙女（‘la damoisele a l’espee’）は騎士たちに、その場に來た人が支払うべき「通行料」（‘paiage’）をゴーヴァンには免除するよう求める。その「通行料」が、兜を満たすほどの量の血だと聞いたゴーヴァンは、血を差し出すのをよしとせず、騎士たちとの戦いを始める。するとベッドで寝ていた騎士が目を覚まし、剣を首に掛けた乙女が連れ帰った騎士の活躍を目の当たりにする（689節）。

塔の中に入ったときゴーヴァンは、肘掛け椅子に座った乙女（‘la damoisele qui siet en la chaire’）を見かけていたが、その乙女が扉を開けると、騎士たちは攻撃を中止する。乙女がゴーヴァンから剣を取り上げると、騎士たちは攻撃を再開する。不利な状況をものともせずゴーヴァンが戦いを優勢に進めると、乙女はゴーヴァンの拳をつかみ、乙女が先にいた部屋まで連れて行き、血を差し出すよう求める。そのとき乙女は武装騎士たちがゴーヴァンの血を求めていた理由を、病床に就く騎士に触れながらこう説明する。

9) ‘Mais il avoit eü tant de mal qu’il ne parloit mais, ne ne pot gesir se enviers non, car il avoit le bras senestre si plain d’enflure et de pertruis, et le destre jambe autresi, qu’il ne se pooit tant ne quant remuer ; et si flairoit tant durement que a paines pooit on durer en la chambre quant li couvretours estoit reversés.’, *Le Livre du Graal*, t. II, *op. cit.*, pp. 685-686.

この騎士は、ご覧になったとおり、病がとてもひどいのです。彼の病は、この世で2番目に立派な騎士がその血を腿に塗り、最良の騎士がその血を腕に塗ってくれぬ限り、決して治らないのです。そうしてもらえば、全快するのです¹⁰⁾。

乙女の話聞いたゴーヴァンは、自分は「この世で最良の騎士」(‘li miudres chevaliers del monde’) ではないと述べながらも、喜んで己の血を差し出すことに同意する。すると召使いや乙女たちが部屋に入ってきて、ゴーヴァンの兜をはずし、右のショース(‘chauce destre’) (タイツ風の長靴下) を脱がせる。手渡された剣でゴーヴァンが自分の腿を叩くと、血がほとばしり出てくる(690節)。

ゴーヴァンに血を差し出すよう求めた乙女は、彼が身体に負った怪我を調べさせる。ゴーヴァンの噂を聞きつけて部屋にやって来たある若者は、ゴーヴァンの怪我を目の当たりにして悲しみ、病床で眠る騎士の方へ向かう。するとちょうど、騎士の脚にゴーヴァンの血が塗られている最中だった。その場を離れるよう言われた若者は別の部屋に行き、悲しみに身を任せる。しばらくすると、病床の騎士が目を覚まし、深い溜息をつく。そのとき隣の部屋から若者の叫び声が聞こえたため、驚いた騎士がベッドから起き上がろうとすると、病んでいたはずの脚が治っていたことに気づく。そこで騎士は嘆く若者に会いに行く(691節)。

若者はモルドレ(Mordret)であり、血を差し出した兄のゴーヴァンが死んでしまったと勘違いし嘆いていたのだった。この話をモルドレから聞

10) ‘Cil chevaliers est si malades comme vous avés veü ; si ne garira jamais devant ce que li miudres chevaliers sans un li avra ointe sa quisse de son sanc, et li autres, qui miudres est, li ait oint le bras : et lors sera il tous sains et tous haitiés.’, *Ibid.*, p. 689.

いた騎士も卒倒してしまう。ゴーヴァンの血を求めた乙女は、脚の病が回復した騎士の恋人であり、騎士が意識を取り戻すと、ゴーヴァンが致命傷を負っていないことを伝える。そこで騎士は誰の助けも借りずに、歩いてゴーヴァンのいる部屋に向かう（692 節）。ゴーヴァンは相手が弟のアグラヴァンだと分かり、再会を喜ぶ。

(2) アグラヴァンが病に侵された経緯

ゴーヴァンから、腕と脚が病に侵された経緯について聞かれたアグラヴァンは、アーサー王とガルオー（Galehaut）が和解に至った会戦の後で、恋人に会うために現在滞在中の国へ向かった話を始める。アグラヴァンの恋人とは、ゴーヴァンが塔で見かけた肘掛け椅子に座った乙女であり、血を差し出すよう求めた人である。旅の途中にアグラヴァンは、恋人が送り出した使者に出会い、急いで恋人の許へ駆けつけた。なぜなら恋人はノルガル（Norgales）国のトラドゥリナン（Tradelinant）王だった父によって、別の騎士と望まぬ結婚を強要されていたからである。その後アグラヴァンは、恋人を取り戻すに至ったという（693 節）。

それからまもなくのこと、アグラヴァンが自分の館に近い森で午前中狩りをし、泉の傍にそびえていたエジプトイチジク¹¹⁾の木の下で眠り込んだときに、問題の事件が発生したのだという。それは8月初めの暑い日で、アグラヴァンとともにいたのは、馬番を任された近習1人だけだった。近習の話によると、アグラヴァンが眠っている間に、儀仗馬に跨った乙女が2人現れ、それぞれが箱を1つ（‘une boiste’）手にしていたという。馬から下りた2人のうちの1人は、アグラヴァンの頭の下に枕を置いて眠

11) エジプトイチジク（*sycomore*）については、A. Planche, *Des plantes, des bêtes et des couleurs*, Orléans : Paradigme, 1998, pp. 99-120 (« La Dame au *sycomore* ») を参照。

らせたまま彼の片脚に何かを塗り、もう1人の乙女は、彼の左腕に何かを塗ったという。アグラヴァンに仕返しができたことに満足した2人は帰り際に、彼が負った怪我を治すための手立てを言い残していったという。その手立てとは、病に侵されたアグラヴァンの腕と腿がそれぞれ、この世で最良の騎士の血と2番目に立派な騎士の血が塗られる日に治るというものだった。2人の乙女が立ち去った後、近習はアグラヴァンを起こしに行くが、枕のせいで眠りから覚めないままだった。近習に身体を揺さぶられて枕がはずれ、ようやく目覚めたアグラヴァンは、腕と脚の痛みに耐えられず、近習に担架で運んでもらう。道中アグラヴァンは担架の上で枕をして休んでいたが、そこへ武装騎士が現れ、枕を奪い去ったという(694節)。

このようにアグラヴァンは病に至った経緯をゴーヴァンに語った後、現在滞在中の館は、カンベニック (Cambénic) 公がノルガル王から奪い取り、授けてくれたものであることを明かす。アグラヴァンの恋人は先述の通り、ノルガル王の娘であるが、王には娘が2人おり、妹娘の方は噂に聞いたゴーヴァンに処女を捧げたいと述べていたという¹²⁾ (695節)。一方でゴーヴァンは、剣を首に掛けた乙女に、「この世で最良の騎士と2番目に立派な騎士」の身許を明かすよう求める。すると乙女は、2人のうちの1人はゴーヴァンであり、もう1人は名を知らぬ騎士で、アーサー王とガルオーとの会戦で一番の活躍をした人だという。また乙女が首に剣を

12) 一度も会ったことがないのに噂を聞いてゴーヴァンを熱烈に愛する乙女のモチーフは、古フランス語で書かれた「アーサー王物語」に馴染みのものである。例えば、逸名作者の『アンボー』(Hunbaut) (13世紀後半)に登場する「ゴー・デストロワの姫君」(la dame du Gaut Destroit)は、ゴーヴァンの噂を聞いて恋心を寄せ、職人に命じて木製のゴーヴァン像を作らせていたという。拙稿「動かぬ規範が動くとき—13世紀古仏語韻文物語『アンボー』の描くゴーヴァン像」(中央大学人文科学研究所編『剣と愛と—中世ロマンニアの文学』中央大学出版部、2004年、67-92頁)を参照。

掛けていたのは、その剣をゴーヴァンに渡すようアグラヴァンから命じられていたためだった。ゴーヴァンは受け取った剣¹³⁾を、将来を嘱望された勇猛な若者に授けることにする（696 節）。ゴーヴァンはまた、先の会戦を制した騎士がベノイック（Bénoïc）国バン（Ban）王の息子、「湖のランスロ」（Lancelot du Lac）であることを明かす。

ゴーヴァンとアグラヴァンは再会を喜び、夜遅くまで語り合う。翌朝、武装したゴーヴァンは、暇を告げるにあたり、アグラヴァンに彼を病床に就かせた 2 人の乙女の身許を尋ねる。アグラヴァンは全く分からないと前置きしながらも、これまで自分の身に起きたことを振り返り、1 人目の乙女についてはこう答えている。

それでも私はある騎士と戦って、相手の片腕を失わせました。そこへ 1 人の乙女が不意に現れ——それは騎士の恋人だったと思います——、こう言ったのです、「これから私が 1 年生き長らえることができるなら、あなたが今回のことをよかったと思わぬようにしてやりますからね」と¹⁴⁾。

また別の乙女については、次のように詳細な状況を伝えている。

もう 1 人の乙女については、その身許について思うところをお話し

13) 刻まれた銘文によると、この剣はいまだ武勇のない若者向きであり、老練の騎士には向いていないという。さらにこの剣を使いこなせるようになれば、その男は立派な騎士になるという。こうした剣の特性を知ったアグラヴァンは、兄のゴーヴァンに渡すことにしたのである（*Le Livre du Graal*, t. II, *op. cit.*, p. 696）。

14) ‘fors tant que je me combati a un chevalier ; si l’afolai d’un de ses bras. Et une damoisele i sorvint — je quit que ele estoit s’amie—; si me redist que s’ele vivoit un an, que je ne m’en loeroie ja’, *Ibid.*, p. 697.

します。今年、冒険を求めて「^{ベルランド}美しき広野」の森を騎行していると、とても美しい乙女に出会いました。乙女の後には騎士がついていました。乙女にお供がいるのが分かるとすぐに私は、^{はみ}馬銜越しに乙女を捕まえ、乙女を連れて行こうとしました。すると騎士が乙女を助けようとしたため我々は戦い、最後に私は相手を打ち負かしました。そこで私は乙女を捕まえ、深い藪まで連れていきました。馬から下りた私は乙女に、お前と枕をとにもするぞと言いました。そして乙女を儀仗馬から降ろしました。乙女は抵抗しようとしてしました。私は乙女の横に座り、兜を脱ぎ、自分の右脚を腿まで乙女に見せました。乙女は深く悲しみ、できるかぎり抵抗しました。私はそのとき、乙女の片脚に疥癬が腿全体まで広がっているのを目の当たりにしました。今までに見たことがないほど恐るべき疥癬で、これほどの疥癬はなかったと思います。そこで乙女に、このように抵抗するのはもってのほかだと言ってやったのです。なぜなら、仮に自分の手足が不自由だったとしても、ハンセン病患者を相手にしたとき以上に、乙女の身体に触れることはなかったからです。そこで私はその場を離れ、乙女と枕をとにもする騎士が呪われると言ってやったのです。すると乙女の方は私にこう言いました、「これからあなたが1年生き長らえることができるなら、あなたの脚が私の脚以上に醜く、疥癬病みになって腐ることのないよう、あなたは手持ちのものをすべて喜んで差し出していることでしょう」と。この2人の乙女のほかに誰も、私を病気にした人がいるとは思いません¹⁵⁾。

15) 'Et de l'autre vous dirai que je quit que ce fu. Je aloie awan querant aventure en la forest de Lande Bele ; si trouvai une damoisele de moult grant biauté, et après i vint uns chevaliers. Et je le pris par le frain et l'en vos mener, si tost come je vi qu'ele ot conduit. Et li chevaliers le me voloit rescourre : si nous combatismes ensamble, et l'outraï en la fin. Lors pris la damoisele et l'en menai tant que je ving

話を聞いたゴーヴァンは、立派な騎士が慢心を見せ、相手に不親切な態度を取るのは無礼なことだと述べてアグラヴァンをたしなめる。物語の語り手はここで、アグラヴァンが当時、特に傲慢で情け容赦のない騎士の1人だったと付言している¹⁶⁾。

このエピソードから、アグラヴァンを病床に就かせた2人の乙女は、それぞれがかつて異なる時期に彼から受けた屈辱への報復のためにやって来たことが分かる。1人目の乙女は恋人の騎士がアグラヴァンに片腕を切られたため、アグラヴァンの左腕に膏薬を塗り、2人目の乙女は片脚の腿全体に広がる疥癬をアグラヴァンに見られて嘲弄されたため、アグラヴァンの右腿に膏薬を塗ることで、該当する身体部位を患わせたのである。眠り込んでいたアグラヴァンの前で2人の乙女が、彼の病を治す手段とし

a unes broches espesses, si descendi et dis que je gerroie a li ; si le mis jus del palefroi. Et ele s'en vilt desfendre. Et je m'asis lés li, si ostai mon hiaume et li descouvri la destre gambe jusques envers la quisse amont ; et ele faisoit moult grant doel et s'en desfendoit au plus qu'ele pooit, si vi qu'ele avoit tele la jambe jusques au gros de la quisse si roignouse que onques si roignouse ne vi, ne ne fu veüe au mien quidier. Et je li dis que au mal eur en fesist ele dangier, car se je estoie contrais, ne toucheroie je a li nient plus que a une mesele. Si m'en tournai atant, et dis que honnis fust li chevaliers qui le feroit. Et ele me dist que se je vivoie un an, que je volroie avoir donné quanques je ai mais que la moie gambe ne fust plus laide que la soie, ne plus roignouse ne plus orde. Ne je ne quit par nului avoir prise l'enfermé que par aus. II.', *Ibid.*, pp. 697-698.

- 16) フィリップ・ヴァルテールによると、アグラヴァン (Agravain) の残酷で情け容赦のない性格は、名前の最初の部分「アグル agr-」に表されているという。「アグル」は現代フランス語の「エーグル aigre」に相当するが、この形容詞には「酸っぱい」のほかに「辛辣な」という意味もあり、アグラヴァンの「けんか腰」につながる。一方でアグラヴァンの名は、アグレーヴ (Agrève) という名との関連も持っている。アグレーヴのラテン語形は、「足から生まれてきた者」を指すアグリパヌス (Agripanus) やアグリッパ (Agrippa) である。古代ローマの博物学者プリニウスによれば「難産」を示唆するこうした生まれ方は、アグラヴァンに備わる落ち着きのない気質を説明してくれるのかもしれない (P. Walter, *Dictionnaire de mythologie arthurienne*, Paris : Imago, 2014, pp. 29-30)。

て血による治療法を口にし、これをアグラヴァンの近習が小耳に挟んだため、館では必要な血の獲得のための措置が講じられていた。ゴーヴァンが実際に血を差し出す決意を固めたとき、館の人々がゴーヴァンの右のシューズ（長靴下）を脱がせたのは、アグラヴァンの病に侵された右腿のために、ゴーヴァンの右腿から流れ出る血が必要だったためであろう。

3. ハンセン病治癒に必要とされる血

(1) ペルスヴァルの妹の血（『聖杯の探索』）

ゴーヴァンの血による治療行為を伝える『ランスロ本伝』は、5作品からなる「聖杯物語群」の要の位置にあり、最も古く成立した部分である¹⁷⁾。ところで同じ物語群では『ランスロ本伝』に後続する『聖杯の探索』（*La Quête du Saint Graal*）（1225～1230年頃成立）¹⁸⁾に、血による治療行為が別のかたちで認められる。それはハンセン病患者を治すために、乙女の血を用いるというケースである。『聖杯の探索』は『ランスロ本伝』以降に成立したと考えられているが、『聖杯の探索』成立以前からフランス語圏で知られていたこうしたハンセン病の治療法が、『ランスロ本伝』の逸名作者の念頭にあった可能性は十分にある。なぜならアグラヴァンがゴーヴァンに披露した話の中で、2人目の乙女について、「仮に自分の手足が不自由だったとしても、ハンセン病患者を相手にしたとき以上に、乙女の身体に触れることはなかったからです」と述べ、「ハンセン病患者」（‘mesele’）に言及しているからである。そのため本章では、血を用いたハ

17) 拙稿「古フランス語散文《アーサー王物語》の《サイクル化》—プレイヤード版『聖杯の書』所収『アーサー王の最初の武勲』を手がかりに」（佐藤清編著『フランス 経済・社会・文化の諸相』中央大学出版部、2010年、93-132頁）を参照。

18) 『聖杯の探索』のテキストは、『聖杯の書』第3巻（Ph. Walter, (éd), *Le Livre du Graal*, t. III, Paris : Gallimard, 2009）所収、*La Quête du Saint Graal*, Texte établi, traduit, présenté et annoté par G. Gros による。

ンセン病治療を伝える様々な例を検討する。

まずは『聖杯の探索』が伝える当該エピソードから始めよう。物語冒頭では「聖霊降臨祭」の日に騎士叙任されたランスロの息子ガラアド (Galaad) が、アーサー王宮廷で「危険な椅子」に座ることにより円卓騎士団の仲間入りをすると、宮廷に「聖杯」が出現し、騎士たちに祝福を与えて姿を消す。そのため「聖杯」の行方を追って、円卓の騎士全員が出立する。しかし多くの騎士が探索の途上で命を落とす中、ガラアド、ボオール (Bohort)、ペルスヴァルの3人はコルベニック (Corbénic) 城に到着する。そこでガラアドが「折れた剣」の接合に成功し、「不具の王」の病を治した後、3人は聖地サラス (Sarras) へ旅立つ。ガラアドはサラスで王位に就くが、1年後に死去すると、「聖杯」と「槍」は永久に姿を消したという。

こうした筋書きの中で、コルベニック城へ到着する前の時点で3人は、ある城の近くを通りかかる (315 節)。3人にはペルスヴァルの妹が同行していた。城の人々はペルスヴァルの妹が処女だと聞くと、ガラアド一行を引き留めようとする。その城の「慣例」(‘la coustume’) により、城を通過する処女は、銀の器 (‘esquiele d’argent’) に右腕 (‘bras destre’) の血を一杯に満たさねばならなかった (316 節)。「不思議な負革の剣」(‘l’espee as Estranges Renges’) を手にしたガラアドが、ボオール、ペルスヴァルとともに城内の人々と9時課 (午後3時頃) まで戦うが (317 節)、晚になると戦いが一時休止され、ガラアド一行は城内で宿を提供されて歓待を受ける (318 節)。

食事後に3人は、城主である若い貴婦人が2年前にハンセン病 (‘meselerie’) に侵され、あらゆる医者を呼び寄せたが、治療の甲斐がなかったことを知らされる。それでもある賢者 (‘uns sages hom’) の話では、「心においても行いにおいても純潔な乙女で、それが王と王妃の娘であれば、

その乙女の血を器一杯に手に入れよ。それを貴婦人に塗れば、たちどころに病が癒えるだろう」¹⁹⁾とのことだった。この話を聞いていたペルスヴァルの妹は、兄を含む3人の騎士が城内の人々との戦いを続けて多くの生命が失われるよりも、自分が命を落とす方が名誉なことであると述べ、慣例を守って血を差し出す決意を固める（320節）。

そこで翌日、ペルスヴァルの妹は、鋭利な小刀で腕の血管を切らせる。ほとぼり出したその血で洗われた女城主の病は、その日のうちに完治し、それまで黒ずんで見るも恐ろしかった体は美しさを取り戻す。長い間失神していたペルスヴァルの妹は、意識を取り戻すと兄に、彼女が亡くなったら、遺骸を小舟に乗せて運命の導くままにするよう頼んでおく。そして、そこへ呼び出された隠者の前で息絶える（321～322節）。

『聖杯の探索』の「ソロモンの舟」のエピソードでは、ペルスヴァルが妹に出会いながらも相手の身許が分からない件があるが、そこで妹は兄に「わたしはあなたの妹、ペルアン王の娘です」²⁰⁾と述べている。物語ではペルスヴァルの妹の名が明かされることはないが、この件は彼女が王女であることを明示している。つまり生まれが高貴で、なおかつ肉体的にも精神的にも純潔な乙女の血が、女城主の患っていたハンセン病を完治させたことになる。器一杯に処女の血を集めるという城の慣例は、『ランスロ本伝』が伝えるアグラヴァンの右脚快癒のエピソードで、ゴーヴァンが兜一杯の血を差し出すように言われる場面を想起させる。

19) ‘se nous puissions avoir plaine esquiele del sanc a une pucele qui fust virge en volenté et en œvre, et si fust fille de roi et de roïne, si en oinsist on la dame, et ele gariroit erroment.’, *Ibid.*, p. 1128.

20) ‘je sui vostre suer, et fille au roi Pellelem.’, *Ibid.*, p. 1082.

(2) 多くの子供たちの血 (『ジョフレ物語』)

血によるハンセン病治癒の試みは、『コルヌアーユのブランダン』(*Blandin de Cornouailles*) とともに、今日まで現存するオック語²¹⁾によるただ2編の「アーサー王物語」の1つ、『ジョフレ物語』(*Le roman de Jaufré*)²²⁾にも認められる。逸名作者は物語の中で「アラゴン王」(roi d'Aragon) への賛辞を送っているが、これが「征服王」の異名を持つジャック1世(Jacques I) (1208~1276年)か、あるいはその前任者アルフォンス2世(Alphonse II) (1152~1196年)のどちらを指すかによって、物語の推定創作年代が異なってくる。現在では後者が有力視され、『ジョフレ物語』の成立は1180年頃と推測されている。この説が正しければ、カタロニアまたは旧ラングドック南部出身の1人(または2人)の逸名詩人は、クレティアン・ド・トロワと同時期に物語を創作したことになる²³⁾。

1万956行にも及ぶ『ジョフレ物語』は、アーサー王夫妻に侮辱を働いた騎士トーラ(Taulat)を追跡する旅に出た若き騎士ジョフレ(Jaufré)が、様々な冒険を重ねるうちに、未婚の若き女城主ブリュニッサン(Brunissen)と出会って恋仲になり、トーラを打ち負かした後、ブリュニッサンとの結婚を果たすという筋書きを辿る。ハンセン病を治すために血が使われる件が出てくるのは、物語を構成する20のエピソードのうち6番目のエピソード(vv. 2181-3016)で、ジョフレがトーラ追跡の旅に出て3日目にあたる。

21) オック語については、井上富江「オック語—その栄光と影」(原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社、2007年、212-217頁)を参照。

22) *Le roman de Jaufré*, dans : R. Lavaud et R. Nelli, *Les Troubadours*, Desclée de Brouwer, 1960, pp. 15-618.

23) *Ibid.*, pp. 30-35.

馬上のジョフレは、腰の下まで裂けた上着を身につけた近習に出会う。苦悶の表情を浮かべた若者はジョフレに、その場を立ち去るよう勧める。たった今、自分の主君がハンセン病患者によって殺され、主君とともにいた若い女が連れ去られたからだという。2人が話をしていると、1人の子供を抱えたハンセン病患者が現れ、その後ろを泣き叫ぶ女が追いかけていく。女はジョフレに、ハンセン病患者から子供を奪い返してくれるよう懇願する。

ジョフレはハンセン病患者を追いかけて行き、相手の家の中に入ると、槍ほどの背丈がある醜怪な巨人がいた。ハンセン病を患っていたその巨人が、棍棒を手に襲い掛かってきたため、ジョフレは剣で応戦し、格闘の末に巨人を倒すが、自らも気を失う。意識を取り戻したジョフレは、別のハンセン病患者がさらってきた子供を探すが見つからない。そこで外へ出ようとする、出口が見つからず絶望する。その後、多くの子供たちの叫び声が聞こえたため、ジョフレが扉を壊して部屋へ入ると、ナイフを手にしたハンセン病患者がすでに8人の子供を殺していた。部屋には25人から30人の子供がいて、泣き叫んでいた。

ジョフレに片手を切り落とされたハンセン病患者は命乞いをする。彼は主人の命令で意に反して子供たちの血を集めていたのであり、主人はハンセン病を治すために血浴みを行っていたと弁明する。この男の話によると、掛けられた魔法のせいで一旦家に入った者は永遠に外へ出られないが、窓辺に置かれた少年の首を取って壊せば、魔法は解除されるという。ジョフレが言われた通りにすると、雷鳴が起こり、嵐が何もかも吹き飛ばし、家は跡形もなくなってしまう。ジョフレに助けを求めた女とその子供、命乞いをしたハンセン病患者は、ジョフレに命じられてアーサー王宮廷に向かったのに対し、ジョフレは1人で旅を続ける。

『ジョフレ物語』の11番目のエピソード (vv. 5170-5660) によると、

深い森の中を進んでいたジョフレは、松の根元で横になっていた醜い老女に出会うが、この女は巨人であり、亡くなった極悪人の夫も巨人だったという。この夫婦には巨人の息子が2人いて、そのうちの1人がジョフレによって倒されたハンセン病患者だったことが判明する。老女はこの息子のために、魔法の掛けられた家を作ってやっていたのだった。つまり、物語の6番目のエピソードに登場したハンセン病患者は、魔法を駆使する女巨人の息子で、病を治すために30人以上の子供たちの血に体を浸していたことが分かる。

(3) 3千人の子供の血（『黄金伝説』所収「シルウエステル伝」）

このように無垢な子供たちの血によりハンセン病の治癒を望むケースは、ラテン語で著された聖人伝にも認められる。13世紀にジェノヴァの大司教ヤコブス・デ・ウォラギネ（Jacobus de Voragine）（1230年頃～1298年）が集成した『黄金伝説』（*Legenda aurea*）（1261～67年頃）が収録する「聖シルウエステル伝」²⁴⁾によると、シルウエステル（Silvester）がローマ教皇に選出された頃、ローマ皇帝コンスタンティヌス（Constantinus）²⁵⁾がキリスト教徒を迫害したためハンセン病にかかったという。

皇帝は八方手を尽くしたものの病気が治らなかったため、偽神に仕える神官たちの助言に従い、3千人の幼い子供たちを集め、子供たちの血で湯浴みすることにする。しかし血の入浴が準備されている場所へ皇帝が向か

24) ヤコブス・デ・ウォラギネ（前田敬作・今村孝訳）『黄金伝説1』人文書院、1979年、166-184頁。

25) 313年にミラノ勅令を發布し、キリスト教を公認したローマ帝国の皇帝（在位は306～337年）。330年には帝国の都をローマからビュザンティオン（ビザンティウム）に移した。皇帝自身は常勝太陽神（ソル・インウィクトゥス）の信者だったが、臨終の席で洗礼を受け、キリスト教徒になったとされる。

うと、子供らの母親たちが皇帝のそばに駆け寄って激しく泣き叫ぶ。そこで皇帝は、敵国の子供たちに対してさえ禁じていることを自国の子供たちに行うのは言語道断の残虐行為であり、子供たちの犠牲を払ってまで生き長らえるよりは死ぬほうがましだと述べ、母親たちに金を与え、子供たちとともに家に返したという。その夜、皇帝の夢枕に現れた聖ペテロと聖パウロから、司教シルウエステル（Silvester）の指示に従って、泉に3度身を沈めれば、病が治ると教えられる。こうしてハンセン病の治癒に成功したコンスタンティヌス（Constantine）は、キリスト教に改宗したという。

この聖人伝の主人公であるシルウエステルは、第33代ローマ教皇（在位314～335年）であり、教会史上重要な時期にローマで活躍したにもかかわらず、ラテラノ大聖堂の建造を除けば、彼の史実はほとんど知られていない²⁶⁾。またコンスタンティヌス大帝がハンセン病にかかり、シルウエステルの指示により病が快癒したという話も伝説の域を出ない。ここで重要なのは、異教を奉ずる神官たちがハンセン病の治療法として無垢なる子供の血を用いた血浴みを勧める件が、13世紀に編纂された『黄金伝説』に見つかることであり、この伝承がヨーロッパに広く浸透していたことを裏付けてくれる。

(4) 友人の子供たちの血（『アミとアミルの友情』）

『ジョフレ物語』と『黄金伝説』所収「シルウエステル伝」に認められた、ハンセン病治癒のために子供の血を使う話は、13世紀初頭にフランス語散文で書かれた『アミとアミルの友情』(*Li Amitiez de Ami et*

26) シルウエステルはラテン語で「森」を意味する「シルウァ」(*silva*)を語源としているため、神話学的には「野人」の類型に属している。この点については、フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）『中世の祝祭 伝説・神話・起源』原書房、2007年、80-81頁を参照。

Amile)²⁷⁾という物語にも認められる。名前も姿形も酷似した2人の男の友情をテーマにしたこの話は、11世紀にラテン語で書かれた書簡詩²⁸⁾に武勳詩伝説の1つとして認められるという。この伝説は12世紀になるとラテン語による聖人伝²⁹⁾へと変貌する。その忠実なフランス語版が13世紀初頭の版である。

物語によると、アミ (Ami) はドイツ生まれの貴族 (ベリカン Bericain の城主) の子、アミル (Amile) はフランスのオーヴェルニュ (アルヴェルヌ) 伯の子として生まれるが、容姿がよく似ており、同じ日にローマ教皇から洗礼を受け、固い友情で結ばれる。2人はフランス王シャルル (Charles) に仕えるが、その後アミがハンセン病にかかり、妻オビヤス (Obias) によって国を追われる。アミは2人の従者とともにローマへ赴き3年留まるが、町を飢饉が襲うと、一行は王女ベリザン (Belisant) と結婚していた親友アミルの館へ身を寄せる。その後、ある夜のこと、大天使ラファエルがアミの許を訪れ、ハンセン病を治すにはアミルの2人の子供の血で体を洗わねばならぬと教えられる。この話をアミがアミルに打ち明けると、アミルはかつてアミが自分に代わって死を賭して決闘を制してくれたことを思い出しながら、3歳ばかりになっていた息子たちの首を

27) 邦訳は、神沢栄三訳『アミとアミルの友情』(『フランス中世文学集3 笑いと愛と』白水社、1991年、7-27頁)を参照。

28) この書簡詩は、1090年頃にフルリ・シュル・ロワール (Fleury-sur-Loire) の修道僧ラウル・ル・トゥルティエ (Raoul le Tourtier) が著した *Epistolae ad diversos* である。その第2の書簡詩 (*Ad Bernardum*) は友情を称える内容であり、「ダモンとピティヤス」(Damon et Pythias)、「ニススとエウリヤルス」(Nisus et Euryalus) に続いて「アミクスとアメリウス (アミとアミル)」(Amicus et Amelius) の友情を物語っている。

29) この聖人伝 (*Vita sanctorum Amici et Amelii carissimorum*) は、2人の聖人アミクス (アミ) とアメリウス (アミル) の受難の物語であり、北イタリアの町モルタラの郊外にある聖アルバン教会の縁起譚となっている (作者は同教会の僧侶と推測される)。

刎ね、流れ出た血を集めてアミの身体を洗う。こうして病の癒えたアミがアミルとともに教会へ行き、家に戻ると、死んだはずの子供たちはベッドの上で遊び戯れていたという。この話では子供たちの蘇生という形で神の奇蹟が称えられているが、穢れを知らぬ子供たちの血がハンセン病を治すというモチーフが話の大団円に用いられている点が注目される³⁰⁾。

4. おわりに

本稿では、『ランスロ本伝』に認められるアグラヴァンの右脚治癒エピソードで決定的な役割を演じる「ゴーヴァンの血」の雛形として、ハンセン病治療に効果があるとされた穢れを知らぬ人間の血を想定し、複数の例を検討した。この想定の本拠となるのは先述の通り、「聖杯物語群」で『ランスロ本伝』に後続する『聖杯の探索』に認められる、「バルスヴァルの妹の血」による女城主のハンセン病治癒エピソードである。女城主が患っていた病を治した血は、心も行いも純潔だった王族出身のバルスヴァルの妹の血だった。これに対して『ジヨフレ物語』や『アミとアミルの友情』、さらには『黄金伝説』所収「聖シルウェステル伝」が伝える例は、ハンセン病の治癒に無垢な子供たちの血を用いるという伝承に基づくものだった。『ランスロ本伝』の逸名作者がこうした伝承に通じていたとすれ

30) 子供の血が病気の友を治すというモチーフは形を変えて、グリム兄弟の『子供と家庭の童話集』(Kinder- und Hausmärchen)の第2版以降が収録する「忠臣ヨハネス」(Der treue Johannes)に認められる。この話によると、若き王のために黄金の屋根の国の王女との出会いをお膳立てした忠臣ヨハネスは、王子と王女を待ち受ける恐ろしい運命の成就を阻止したため、自らは石と化してしまふ。王は王女と結婚して双子をもうけるが、ヨハネスの忠義を知って深く後悔すると、ヨハネスの再生を願う。すると石像のヨハネスが口をきき、王が双子を殺してその血を石像に塗ってくれば生き返ると言う。そこで王が言われた通りにヨハネスを蘇らせると、ヨハネスは王に感謝して、首を刎ねられた双子を生き返らせる。

ば、その独創性は、治癒をもたらす血の所有者を純潔な王女や穢れを知らぬ子供から「騎士の鑑」へと改変したところに認められる。

謝辞 本稿は2012年度中央大学特定課題研究費の助成を受けたものである。ここに特記し感謝の意を表したい。